

報告

[平成15年1月25日(土) ホテルライフオーポート札幌]

北海道医師会少子化対策シンポジウム(3)

—こどもたちは北海道の希望です—

◇地域保健部◇

シンポジウムⅢ  
プレネイタル・ビジット  
—モデル事業を実施して—

函館中央病院 副院長 山田 豊

先ほどのお話にもありましたように、平成13年度母子保健強化推進特別事業ということで、函館も手をあげまして、実際モデル事業をさせていただきました(図1)。

実施主体は函館市ということで、趣旨は先ほどから出ているように妊産婦さんが持っている様々な育児不安の問題の解決のために、産科医と小児科医が連携してあたるということです。それで、事業内容はいろいろと指導するということなのですが、その事業のあり方をどうしたらいいのかということで、検討の材料という形でモデル事業を行いました(図2)。

(図3)は大阪府保健問題研究会が育児について一番心配だった時期は?として、1番上は4カ月健診時であり、2番目は7カ月健診時、そして

3番目は11カ月健診時、4番目が1歳半健診時、一番下が3歳半健診時のおかあさん方に、どの時期が一番不安だったかということを探ったデータなのですが、やはり退院後1カ月の間が一番不安である。どの時をとっても退院後1カ月間である。あと、3歳半健診の時では1歳前後のときも少し不安があるのだが、圧倒的にこの時期が多い。プレではなくて、ポストも入れて、出産前後に、小児科医による育児に関する相談指導を希望

図2

函館市プレネイタル・ビジットモデル事業  
(平成13年度母子保健強化推進特別事業)

**事業の内容** :産科医と小児科医が連携し、妊産婦や育児の状況について情報交換を行うとともに、そのケースに添った保健指導を実施することにより、妊娠から育児までの総合的で一貫した育児支援を提供するものであり、その効果や連携のあり方について、分析・評価するものである。

函館市プレネイタル・ビジットモデル事業  
(平成13年度母子保健強化推進特別事業)

**実施主体** :函館市

**趣旨** :妊産婦が抱える様々な育児不安の問題解決のため、産科医と小児科医の効果的な連携のあり方について検討し、母親の育児不安の解消と子どもの心の安らかな発達の促進を図るため、本事業を実施するとともに、そのあり方について検証するものである。

図3

育児について一番心配だった時期  
(大阪府保健問題研究会)

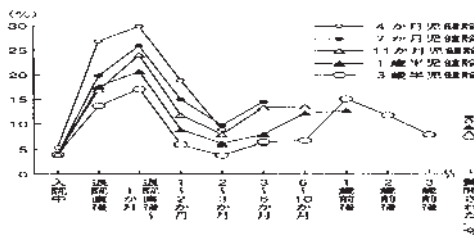


図3 育児について一番心配だった時期 (大阪府保健問題研究会)

する方、産科医が必要と判断する妊婦およびその配偶者も入れております。(図 4) 左側がプレで、育児の負担感や育児不安があるため出産前に小児

**モデル事業対象者**  
**函館市内に居住する妊産婦とその配偶者**

育児の負担感や育児不安があるため出産前に小児科医による相談指導を希望または産科医が必要と判断する妊婦およびその配偶者	出産後に小児科医による育児に関する相談指導を希望または産科医が必要と判断する妊婦およびその配偶者
--	--

科医による相談指導を希望または産科医が必要と判断する妊婦およびその配偶者ということで、右側は出産後に必要とする妊婦さんとその配偶者です。そのときにテキストを配布しましたが (図 5)、1つは文京区で小児科の先生方が育児支援を平成7年からやっておられて、その支援のテキストです。「泣いた、笑った、だいじょうぶ? だいじょうぶ!」という題で、確か500円か600円だと思いました。それから、函館市医師会の児島先生が書かれた「子供の応急手当」という北海道と道医で以前作られた小冊子である。それを配りました。それから、これは1枚のパンフレットだが、チャイルドシートの設置が義務化されたので、是非これをやって下さいということで、お配りしました。それから、この事業を行うにあたり

**モデル事業配布テキスト**

まして、すこやか子育て事業連絡会というのを作りました、市の医師会からは児島先生が理事で、それから壇上先生というのが函館小児科医会の会長で、私も小児科医会の方から出ています。中野先生というのが産婦人科医会の会長で、櫻田先生が産婦人科医会の理事です。石井先生は市立函館保健所長ですが、こういうメンバーで連絡会を作りました (図 6)。(図 7) 保健所の役割ですが、事業実施の総括、事業内容のコーディネート、対象者への啓発・広報、アンケート調査、これは事業の終わった後に妊産婦さんと、小児科医、産婦人科医にアンケートをして、回答をいただいている。あと、事業の評価・分析ですね。そして最後に厚生労働省に実績報告を行っています。後から考えると市保健所はずいぶんと熱心にやってくれたなという気がします。そして (図 8) 産婦人科医会の方は、妊産婦さんに事業の内容を説明し、

すこやか子育て事業連絡会委員名簿

委員名	所 属
児 島 宏 典	函館市医師会
壇 上 保	函館市医師会小児科医会長
山 田 豊	函館市医師会小児科医会
中 野 茂 行	函館市医師会産婦人科医会長
櫻 田 芳 弘	函館市医師会産婦人科医会
石 井 敏 明	市立函館保健所長

**図 7**

**役 割 I (函館市一保健所)**

- 事業実施の総括
- 事業内容のコーディネート
- 対象者への啓発・広報
- アンケート調査
- 事業の評価・分析
- 実績報告等(厚生労働省へ)

周知・徹底を図るということと、参加希望者に申込書を渡す、希望者の内容（住所や年齢などのデータ）を保健所に連絡する。それから、事業実施後、小児科医からの意見書をもとに産科医の立場から保健指導をする。あとはアンケート調査に協力、事業の評価・分析です（図9）。小児科医会の方はどうかというと、小児科医の立場での保健指導、グループワークまたは個別での相談・指導。実際問題としては、グループワークでやってみようとやってみたが、日本人の特性というか・・・これにはなかなかのってくれなかった。事業の実施後産科医と保健所に指導内容を報告する。あとはアンケート、事業の評価・分析。（図10）これは連絡会の経過です。この事業はかなり忙しかったというか、バタバタとして大変だったのです。平成13年4月9日と12日に基本的な打ち合わせ会をやって、第1回目の連絡会が4月18日、こ

図8

### 役割Ⅱ（医師会—産婦人科医会） 委託事業の実施

対象者へ事業内容を説明し、周知を図る  
参加希望者に申込書を渡す  
希望者の内容を保健所に連絡する  
事業実施後小児科医からの意見書をもとに、  
産科医の立場から必要なら保健指導をする  
アンケート調査に協力（回答）  
事業の評価・分析

図9

### 役割Ⅲ（医師会—小児科医会） 委託事業の実施

小児科医の立場での保健指導  
グループワークまたは個別での相談・指導  
事業実施後、産科医（主治医）と保健所へ指導結果を報告する  
アンケート調査に協力する（回答）  
事業の評価・分析

の日は連絡会を設置し、実施要綱の作成等を行った。6月5日になって、第2回の連絡会で、事業実施方法、今後のスケジュールの検討。この間に、6月14日に日本医師会でプレネイタル・ビジットの説明会がありました。そして、6月20日に関心のある産科と小児科の医療機関の先生方への説明会を行いました。それから6月27日に第3回の連絡会をやって、指導事項のマニュアルの作成、マニュアルも昭和大学の奥山先生の作られたものを基に時間がなかったもので、私が作って、後は山田私案ということで配りました。紹介状の様式をどうするか、周知方法、委託契約、一応、市の事業なので、市議会にかけなければならないということで、結構、スケジュールがタイトでした。7月1日が事業開始で、6カ月間、12月31日までということで行いました。1回目は7月14日です。途中で8月29日に第4回の連絡会を開きまして、進捗状況の検討を行い、保健所の予想よりかなり少なかったということで、すこし焦っていました。それから今後の周知方法について検討いたしました。最後に平成14年4月5日に第5回連絡会で、事業の実績報告、事業評価を行いました、それで終わりということでした。（図11）はフローチャートですが、産科医からこの事業の説明をし、参加を促してもらって、その紹介を保健所の方がまとめました。だいたい1カ所の小児科のところに10組以上入れないように、基本的な考えで入れました。土・日に開催しましたが、前の週金曜日までに保健所が取りまとめて名簿を作りまして、参加者を小児科医の方へ連絡しておりま

図10

### 連絡会の経過

平成13年4月9日と4月12日 打ち合わせ会  
**平成13年4月18日 第1回連絡会**（連絡会設置、実施要領の作成等）  
**平成13年6月5日 第2回連絡会**（事業実施方法、今後のスケジュール等）  
**平成13年6月20日 関係医療機関説明会**  
**平成13年6月27日 第3回連絡会**（指導事項マニュアル作成、紹介状の様式、周知方法等、委託契約）  
**平成13年7月1日 事業開始 平成13年12月31日まで**  
平成13年8月29日 第4回連絡会（進捗状況、今後の周知について）  
平成14年4月5日 第5回連絡会（事業実績報告、事業評価）

す。

今回は参加者がそんなに多くなかったので、保健所のほうで調整してということはありませんでした。それから、小児科医の方は保健指導とグループワークまたは個別指導、助言指導して、育児支援を妊産婦にするということで、その結果を産科医に戻す、それから実施報告を保健所に送るということでやっています。周知方法がなかなか大変で、参加医療機関は、産婦人科21、小児科15が手を上げたのですが、各医療機関にポスターを1~2枚、それからリーフレットを50枚から100枚配布しています。また、保健所で母子手帳交付時や両親学級等でPRしたり、それから報道機関に教室開催についての報道を依頼しています。(図12)ポスターとリーフレットは同じ図案なのですが、初めてのお母さん、お父さん参加してみませんか?というこで、こういったものを作っています

図11

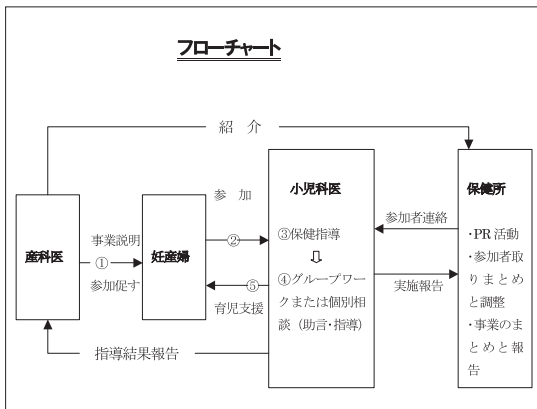


図12

**周知方法 I**

**参加医療機関 産婦人科 21 小児科15**  
**各医療機関に ポスター 1~2枚**  
**リーフレット 50~100枚配布**  
**保健所で母子手帳交付時や両親学級等で周知**  
**報道機関へ教室開催について報道依頼**

す。問合せ先は保健所です(図13)。

また、函館新聞に7月から「健やか子育て事業」出産前に育児指導、虐待防止も期待一と載せていただいて、北海道新聞の函館版の夕刊、6月8日一妊産婦の悩み小児科医も対応一も載せていただきました。さらに7月8日、これも道新の道南版に、連絡会の児島先生が日曜トークの中でこのことが出ております。それから同じ日ですが、地元の函館新聞で一14日からスタート一ということで、第1回目はうちの病院で担当は私だったので、それから途中で連絡会を8月29日に行ったのですが、産科医からの紹介が、保健所が考えているよりも少なかったために教室開催が少し難しいということで、保健所の係長さんが紹介実績の少ない医療機関を訪問して、事業を説明した上で協力を依頼していただいたといった経過があります。函館の地域を西部地区が小児科医院が3ヵ

図13

**すこやか子育て事業**

はじめてのお母さん・お父さん参加してみませんか?

函館市では、お母さんの子育てを応援するために、市内の産科医院に受診されている妊産婦の皆さんを対象にすこやか子育て事業を開催します。

場 所 小児科医院等 (別紙の小児科医院)  
 期 間 平成13年7月~12月  
 内 容 講 話 (赤ちゃんの健康のこと、育児のこと、母乳のことなど)  
 グループワーク (お母さん同士が話し合い、小児科の医師の指導を受けることにより、子育てについての正しい知識を学ぶ)

お父さんもお母さんとも参加をお気軽に召掛けください  
 ※ 詳細は出産 育児はお母さんひとりだけのものではありませんが、お父さんの協力や応援が必要となります。

☆ 詳しくは産婦人科主治医にご相談ください。

お問い合わせ 函立函館保健所保健予防課 保健師  
 電話 132-1513

図14

○ 総合病院および協力医療機関を地域に区分けし、それぞれの地区毎に輪番で開催

すこやか子育て事業協力医療機関 (小児科医会)			
①	A	はぎさわ小児科クリニック	時任町23-10
地 区	B	そね小児科医院	杉並町19-19
	C	こんの小児科医院	亀田町20-10
	②	D	児島小児科医院
地 区	E	函館線北病院	中道2-51-1
	F	すずき小児科医院	美原1-39-20
地 区	G	こじまキッズクリニック	亀田港町39-4
	H	えんどう桔梗こどもクリニック	桔梗372-375
	③	I	權上小児科医院
地 区	J	にれ小児科医院	東山2-4-3
	K	池田小児科医院	本通3-1-6
地 区	L	大河内小児科	日吉町3-43-15
	M	市立函館病院	稚町1-10-1
総合病院	N	函館五稜郭病院	五稜郭町38-3
	O	函館赤十字病院	堀川町6-21
病 院	P	函館中央病院	本町33-2

所、北部地区が5ヵ所、東部地区が4ヵ所、あとは総合病院ということで分けまして、各々分担してやったのですが、市立病院は土・日に開催は難しいということで、今回は抜けました(図14)。

7月から12月までの間に、土・日は8回~10回ありますが、そのうちの5回ないし6回のどこか選んで、地域が重ならないように開催するという調整をしました。結局、(図15)の如く実施医療機関は産婦人科は13ヵ所で16人の先生がかかわった。

小児科は15医療機関で16人の先生がかかわって、紹介された人数は99人なのですが、在胎週数でいくと、23週未満の方が35人、24週~27週の方が15人、28週~31週の方が22人という感じで、あとは、出産後が7人おられました。紹介ルートで一番多いのは、開業されている産婦人科の先生から開業されている小児科の先生への紹介が62件である。次は診療所の産婦人科から病院の小児科へ

このことについて、下記のとおり報告いたします。

1 事業実施期間 平成13年7月1日から平成13年12月31日まで

2 実施医療機関  
 ① 産婦人科医数 16人 (医療機関数 13件)  
 ② 小児科医数 16人 (医療機関数 15件)

3 紹介状況

① 産婦人科医から小児科医へ

紹介時期	件数
~23週	35
24~27週	15
28~31週	22
32~35週	14
36週~	6
出産後	7
その他	-
計	99

② 連携状況

病(産)病(小)連携	件数
病(産)病(小)連携	8
病(産)産(小)連携	6
産(産)病(小)連携	23
産(産)産(小)連携	62
その他	-
計	99

図16

### 実施報告書

No.	開催日	開催時間	開催場所	申込者		参加者		単位:人
				妊産婦	配偶者	妊産婦	配偶者	
1	H13.7.14	14:00	A病院	7	1	7	1	1
2	H13.7.21	14:00	B病院	4	2	4	4	0
3	H13.7.22	14:00	C小児科	1	1	1	1	0
4	H13.7.28	13:30	D小児科	5	0	5	0	0
5	H13.7.28	15:00	E小児科	2	0	1	1	0
6	H13.8.4	13:00	F小児科	2	2	1	1	1
7	H13.8.11	14:00	G小児科	1	0	1	0	0
8	H13.8.19	10:00	H小児科	2	2	2	2	0
9	H13.8.25	16:00	I小児科	5	3	4	4	2
10	H13.8.26	14:00	J病院	3	3	4	4	3
11	H13.9.8	14:00	K小児科	2	1	2	1	1
12	H13.9.9	10:00	L小児科	3	2	3	4	2
13	H13.9.22	14:00	M小児科	8	5	7	7	5
14	H13.10.6	14:00	N病院	1	1	1	1	0
15	H13.10.13	13:00	O小児科	1	1	1	1	1
16	H13.10.14	10:00	P小児科	3	3	2	2	2
17	H13.10.20	13:00	Q小児科	3	2	2	2	2
18	H13.10.21	10:00	R小児科	5	4	4	4	2
19	H13.10.27	13:00	F小児科	3	1	2	1	1
20	H13.11.10	14:00	M小児科	8	5	8	5	5
21	H13.11.10	10:00	H小児科	6	3	6	5	2
22	H13.11.17	13:00	病院	1	1	1	1	1
23	H13.11.17	14:00	K小児科	1	0	2	0	0
24	H13.11.24	14:00	A病院	7	3	7	2	3
25	H13.12.1	13:30	D小児科	2	1	6	2	2
26	H13.12.8	14:00	G小児科	2	1	1	1	1
27	H13.12.15	14:00	O小児科	2	2	2	1	2
28	H13.12.22	14:00	B病院	1	1	1	1	0
	合計			99	51	87	39	

は23件ということで、2つがかなり多い。99件紹介されて、結局教室に参加された人は87人でした。同伴者というか、ご主人も参加された方が39人おられたということで、トータルでは126人の方が参加されました。それで、実施報告ですが、

(図16)の如くトータル28回行ったのですが、私の時は参加者が7人と配偶者が1人だったのですが、この中に1人というのが結構あります。配偶者が参加されて1人と1人で2人というのがあります。もしこの1人がいなかったら0人のところできてしまいます。1人しか参加しなかったときの小児科の先生にはちょっと申し訳なかったなという気がいたします。

指導内容(図17)は栄養、おっぱいの話とか、おっぱいが不足しているのをどうやって判断するかとか、そういった栄養の話が86件、後は嘔吐とか溢乳などの話や、育児の心構えとか、また一般生活、寝かせ方とか外出、それから予防接種の問題とか保温の問題とか、日々の清潔・沐浴とか、結構一般的な話が指導内容としては入っています。(図18)は保健所の反省ですが、小児科医の立場から育児に関する保健指導をすることにより、妊産婦が抱える育児不安の軽減と生まれてくる子供のかかりつけ医の確保の促進を図ることを目的としたことと、教室は集団での開催とし、育児不安が高いといわれる出産前後の妊産婦を対象に実施したことは他のところでもやっているが、ある程度の独自性がある。

当初、参加者を320名を見込んでいた。函館の年間出生数が2,000ぐらいなので、半年間の実施

### 指導内容

	具体的内容	件数
1 育児の心構え	家族関係の悪化、父親の役割、親子関係について	85
2 栄養	母乳不足、母乳不足の判断、母乳が不足する際の対応	86
3 保温	環境、温度について	74
4 皮膚の清潔・沐浴	石鹸の選択と使用方法、沐浴の回数、お風呂の温度、お風呂の時間	76
5 よく見られる症状	嘔吐・溢乳・腹痛・夜泣き・発熱・発赤・排便回数と便の性状、黄疸	85
6 一般生活について	寝かせ方と睡眠の時間、生活環境、外出で旅行について	80
7 上の子への対応	上の子への接し方について	28
8 予防接種	予防接種の種類と効果について	76
9 乳幼児健診	健診の必要性と内容について	77
10 働く母親の保育所問題	-	-
11 その他	小児科への受診、夜間、休日の緊急対応について	64

※ 10は日本医師会モデル事業の結果報告書の項目による。

期間で、1,000名の内の1/3くらいと見込んだらしいのです。しかし、産婦人科からの紹介が少なかったために8月末に連絡会を開催して、先ほどお話をしたように協力依頼を行った。しかしながら紹介数はそれほど増えず、見込み件数の約30%となったと反省しています。(図19~20)は実際参加された妊産婦さんのアンケートの結果なのですが、対象者が97件、回答者が44件、回答率は45%ですが、大体、参加者の年齢は20歳代、30歳代が併せて90%以上で、初産の方が75%。それから、教室の開催を知ったのは「産婦人科医の紹介から」が74%で最も多かった。

また、受講する小児科を選択した理由ですが「家の近く」が最も多く、続いて「評判が良かったから」を併せて60%、さらに出産後に受講した小児科への受診希望はおおむね60%であった。集団指導後の育児についての個別相談は少なかった

図18

産婦人科医と小児科医が連携を図り、子育て支援としての本事業を実施した。小児科医の立場からの育児に関する保健指導をすることにより、妊産婦が抱える育児不安の軽減と生れてくる子どものかかりつけ医の確保の促進を図ることを目的に教室を開催したものである。

教室は集団での開催とし、育児不安が高いといわれる出産前後の妊産婦を対象に実施したことは、他都市と比べ、函館市の独自性が現れていると思われる。

当初、参加者を320名見込んでいたが、産婦人科からの紹介が少ないため、平成13年8月末に連絡会を開催し、産婦人科医機関間で協力依頼した。

しかし、紹介数はそれほど増えず見込み件数の約30%となった。

図19

### アンケート調査(妊産婦) I

対象者97件 回答44件(回答率45%)

対象者の年齢 20歳代、30歳代併せて90%以上。出産歴一初産75%

教室の開催を知ったのは「産婦人科医の紹介から」で74%で最も多かった。

受講する小児科を選択した理由は「家の近く」が最も多く、続いて「評判が良かったから」を併せて60%を占め、さらに、出産後に受講した小児科への受診希望は概ね60%であった。

が、受講後の育児不安については「全く不安なかった」と言う方と、「多少不安があったが受講前ほどではない」と言う方を合わせると約90%であった。また、出産後「指導を受けたことが育児に役立っている」が60%近くあり、育児に役立った内容は「育児の心構え」「よく見られる症状・状態」「栄養」となっている。そして、父親の教室参加者は全体で39人、大体45%である。また、受講後、父親の育児に関する意識が「変わった」が67%ということでした。

(図21~26)は受講者の感想ですが、安心して通院している。質問することに抵抗がなくなったとか、実際に小児科の先生の話なので、信用できて良かったとか、妊娠中はピンとこなかったが、出産後参考になっているという、同様意見が他にも2つ。また疑問を解決できたので、参加して良かったという、同様意見が他にも1つ。妊娠中に

図20

### アンケート調査(妊産婦) II

集団指導後の育児についての個別相談は少なかったが、受講後の育児不安については「全く不安なかった」、「多少不安があったが受講前ほどでない」を併せると約90%であった。

出産後「指導を受けた事が育児に役立っている」が60%近くあり、育児に役立った内容は「育児の心構え」「よく見られる症状・状態」「栄養」となっている。

父親の教室参加者は全体で39人で44.8%である。また受講後、父親の育児に対する意識が「変わった」が67%であった。

図21

### 受講者の感想 I

安心して通院している。質問する事に抵抗がなくなった。実際に小児科の先生の話なので、信用できてよかった。妊娠中はピンと来なかったが、出産後参考になっている(同様意見他2件)

疑問を解決できたので、参加してよかった(同様意見他1件)

妊娠中に小児科の先生にお会いでき、この先生なら安心だと確かめられた。

とてもよかった。育児をしていて役立っている事がたくさんあります。

自分を含めて2名の参加だったが、丁寧に話してくれて、とても気持ちよく帰りました。

小児科の先生にお会いでき、この先生なら安心だと確かめられた。とても良かった。育児をしていて役立っていることがたくさんあります、とかのお褒めの言葉とか、自分を含めて2名の参加だったが、丁寧にお話してくれて、とても気持ちよく帰りましたなど。

また、夫婦で参加された方の感想は、ご主人が外でタバコを吸うようになり意識改革ができた。夫婦で参加するのがベストというような意見があったり、夫と2人で参加でき、心構えの上でプラスになったという意見がありました。また、PRに関してはやはり批判が多いです。もっと目に付くように掲示されていると受講者が増えるとか、もっとPRすべきだとか、出産後新聞記事を見て参加したが、もっとPRをとか。あと、受講者の感想で、産んでから何度か参加できる機会があればいいと思う。実施回数を増やしてほしいとか、

図22

### 受講者の感想 II 夫婦で参加された方

夫がタバコを外で吸うようになり、意識改革ができた。夫婦で参加するのがベスト。  
夫と2人で参加でき、心構えの上でプラスとなった。

図23

### 受講者の感想 III PRについて

産婦人科にもっと目に付くように掲示されていると、受診者が増えると思う。  
妊婦さんの支えになる事業としますので、もっとPRすべき。  
出産後新聞記事を見て参加。もっとPRを。

妊娠5カ月で受講したが。妊娠後期に受講したかったとか、回数を増やして各々の内容を詳しくお願いしたいとか、グループワークは参加しにくいといった意見もありました。内容については、話

図24

### 受講者の感想 IV 機会・実施回数・形式

産んでから何度か参加できる機会があればいいと思う。  
もっと実施回数を多くした方がいい。  
妊娠5ヶ月で受講したが、妊娠後期に受講したかった。  
回数を増やして、各々の内容を詳しくお願いしたい。  
グループワークは参加しにくいと思う。

図25

### 受講者の感想 V 内容について

話だけでなく、オムツ交換、沐浴(の実技)もしたい。  
一般的な内容で、思っていた事と違った。具体的に説明して欲しかった。  
話の内容をパネルなどで説明してくれるともっとわかりやすいと思う。  
当たり前の事を教えて欲しい。(10代・初産)

図26

### 受講者の感想 VI その他

質問しても、もっと聞きたいのにあつさり医師に言われると納得いかない事があるので、そういう母親への対応も考えてもらえたらいいと思う。  
それぞれの医師の考え・方針があるだろうが、市の事業なら統一すべき。または、医師の方針が事前にわかるようにして、選べるようにしては。(受講した)医師の考えに、もっと不安になった。  
上の子を連れて行って、迷惑をかけてしまったので、何らかの対応があればよかった。  
初産婦は何がわからないのかわからない状態。妊婦さんの気持ちになって指導して欲しい。  
当日出産となり、受講できず。無事出産する事で精一杯だった。予定通り受診できていたら、心構えも違ったかも知れない。

だけでなく実技というか、オムツ交換や沐浴もしたいというのもありました。一般的な内容で思っていたことと違った。具体的に説明してほしいとか、話の内容をパネルなどで説明してくれるともっと分かりやすいと思う。(これは用意をする余裕がなかったというのがあるのだが・・・)

また、当たり前のことを教えてほしい、10代の初産の方ですが、何が当たり前なのか分からない、こういった意見もありました。その他で、これは不満というか、質問しても、もっと聞きたいのにあっさり医師に言われると納得いかないことがあるので、そういう母親への対応も考えてもらえたら良いと思う、というのもありました。

また、医師の考え方が事前に分かるように、そして選べるようにしたら良いのではないのか。市の事業なら考え方を統一すべきだ。そして医師の考えにもっと不安になったという意見もありました。また、上の子を連れて行って迷惑をかけたので、何らかの対応があれば、(託児所のことだろうと思いますが)そういうのがあったら良かったとか、初産婦さんは何が分からないのか分からない状態なので、妊婦さんの気持ちになって指導してほしいというご意見もありました。あとは、当日出産だったので受講できなくて残念だったという意見もありました。

そして、(図27～29)は小児科医に対するアンケートですが、15件中、回答が10件で、回答率が67%ですが、小児科医のこの事業に対する関心度は80%と高かった。また、産婦人科からの紹介については「思ったより少ない」と感じていた医療

図27

### アンケート調査(小児科医)

医療機関数15件—回答10件(回答率67%)

小児科のこの事業に対する関心度は80%と高かった。産婦人科からの紹介については、「思ったより少ない」と感じていた医療機関が60%で、「十分だと思った」医療機関は30%あった。  
小児科での指導内容で特に重点をおいたものは、育児不安解消のための「育児の心構え」が最も多いことなどから、当初作成した指導マニュアルに沿って、概ね指導されたものと思われる。また集団での指導後、個別相談を受けたものは50%であり、集団の中で対象者が個別に相談する事は難しい状況にあったかと思われる。  
本事業実施の効果については「育児不安の解消」が最も多く、次いで「母子の愛着形成の促進」となっている。

機関が60%で、「十分だ」と思った医療機関は30%であった。また、小児科での指導内容で特に重点をおいたものは、育児不安解消のための育児の心構えが最も多いことなどから、当初作成した指導マニュアルに沿って、おおむね指導されたものと思われる。また、集団での指導後、個別相談を受けたものは50%であり、集団の中で対象者が個別に相談することは難しい状況にあったかと思われる。

そして、本事業の効果については「育児不安の解消」が最も多く、次いで「母子の愛着形成の促進」と小児科医は回答されています。どのような相談が妊婦さんからあったのかということ、初めての出産・育児についての不安、出産後いつでも相談にのってほしい。それから、アレルギー、お母さんが飲むコーヒーの影響について、子供の病気について、上の子2人が喘息だったので3人目は

図28

### 妊婦さんから小児科医への相談内容

初めての出産・育児についての不安  
出生後いつでも相談にのってほしい  
アレルギーについて  
お母さんが飲むコーヒーの影響について  
子どもの病気について(上の子二人が喘息のため3人目は?)  
丈夫な子に育てるには?  
抗痙攣剤の服用による胎児・母乳への影響について  
上の子との関係について

図29

### 小児科医の意見から

**周知啓発:**周知啓発が不十分であり、産婦人科、小児科双方の協力と行政による啓発が重要であるとする。周知方法を再考—直接妊産婦あて通知するなど検討が必要

**産婦人科との連携:**良かったと答えた医療機関は3件あるが、添書のみでは、なかなか連携が図られたとは言えないという意見もあった。また、紹介する医療機関が偏っていることから、広く他からの紹介を促進する必要があると考える。

**その他:**事業は大変有意義であると思う。出産後からの1ヵ月間が育児不安が大きいことから、その期間に重点をおき実施することを希望する。



どうなるのかといった質問や、丈夫な子に育てるためにはどうしたらよいのかとか、抗痙攣剤をお母さんが飲んでいて、胎児・母乳への影響はどうか、上の子との関係についてなどがありました。

小児科医の自由記載の意見の中では、やはり周知啓発が不十分である。それから産婦人科医との連携では良かったと答えた医療機関は3件あるけれども、添書のみでは、なかなか連携が図られたとはいえないと言った意見もあった。

また、紹介する医療機関が偏っていることから、広く他からの紹介を促進する必要があると思われる。これはその通りなのだが、期間が短かったために周知徹底が図られてなくて、産婦人科医会の会長と副会長、それから理事、3人の先生からの紹介が7割くらいなのです。だから、もう少しPRすれば解消すると思います。その他としては事業は大変有意義だと思う。出産からの1カ月間が育児不安が大きいことから、その期間に重点をおき実施することを希望するというものである。

(図30~32)は産婦人科医の先生に対するアンケートですが、21件中、回答が9件で回答率が43%である。小児科に比べますと、産婦人科の先生の本事業に対する関心は約56%とやや低く、紹介方法は全ての妊婦さんに紹介した先生は44.4%、問題のある妊婦さんに紹介されたのが33.3%と、だいたい8割近くの方が紹介して下さっています。

また、事業の趣旨については、対象者が事前に内容を理解していたのは10%で、妊婦さんに事業

**アンケート調査(産婦人科)**  
医療機関数21件—回答9件(回答率43%)

産婦人科のこの事業に対する関心度は約56%。  
紹介方法は、全ての妊婦に44.4%、問題のある妊婦に33.3%で概ね8割が直接紹介している。  
事業の趣旨については、対象者が事前に内容を理解していたのは10%で、妊婦に事業の趣旨を説明し強く勧めた産婦人科は33.3%であった。  
対象者がこの事業に関する説明を受け関心を持ったように思われるが74%との結果から、産婦人科での趣旨説明が重要。  
事業実施の効果については「育児不安の解消に効果がある」と答えたものが最も多く、また今後実施した場合参加するが約67%あった。

の趣旨を説明し強く勧めた産婦人科は33.3%である。要するに、9件のうち3件ということである。そして、対象者がこの事業に関する説明を受け関心を持ったように思われるが74%との結果から、産婦人科での趣旨説明が重要である。事業実施の効果については「育児不安の解消に効果があった」と答えたものが最も多く、また今後実施した場合参加するが約67%であった。

産婦人科の先生方からのご意見では、周知啓発が不徹底であること。小児科医との連携の部分では、この事業を通じ、産婦人科と小児科の連携が図られたことは良かったと思うが、本事業に対する医師の自己認識を高めるようなアピールをする必要がある。そして、その他として、基本的に産婦人科の本事業に対する認識と積極的な参加につきると思う。赤ちゃんに触れ合える機会の提供など、実施方法については再考する必要があるとい

図31

**産婦人科医の意見から I**

**周知啓発:**周知啓発が図られておらず、広く対象者に周知する必要があるほか、産婦人科医が積極的に妊婦に趣旨説明することが重要であると思う。  
**小児科との連携:**この事業を通じ、産婦人科と小児科の連携が図られたことは良かったと思うが、本事業に対する医師の自己認識を高めるようアピールする必要がある。  
**その他:**基本的に産婦人科の本事業に対する認識と積極的な参加につきると思う。赤ちゃんに触れ合える機会の提供など、実施方法について再考する必要性がある。

図32

**産婦人科医の意見から II**

小児科の選択が無い、地理的にも教室参加が不可能な場合がある。参加した方に分娩後質問したところ、指導そのものは、実際に困った事や心配だったこととの解決には直接結びつかなかったが、出産前に小児科に行き医師と会ったことにより安心でき、受診しやすくなったとの意見が得られ、この事業の目的の主要な部分はある程度達せられたと考える。このようなことから、細かい指導内容より、小児科の雰囲気慣れということや、赤ちゃんのいる生活を具体的にイメージでき「かわいい・楽しめる」と実感できる事に力を入れると良いのではと思う。  
実施の方法がまずい(小児科に予約あるなしの確認をする作業?をするのは煩わしい)本心から言えばあまり参加したくない。本来、精神神経科カウンセラーなどを巻き込んだ取り組みをすべきと考える。  
公的病院が参加していないのはおかしい状況であり、国の「やる気」が感じられなく、参加者を増やせという保健所にも腹が立つ。

うご意見があった。

それから、小児科の選択がない、地理的にも教室参加が不可能な場合があるとか、指導は実際に困ったことや心配事の解決には結びつかないが、小児科を受診しやすくなるとか、雰囲気になれるとか、赤ちゃんのいる生活を具体的にイメージできる「かわいい・楽しめる」と実感することに力を入れると良いと思う、と言うような意見とか、実施の方法がまずい、予約をとるのが面倒くさい、煩わしい。本心から言えば、あまり参加したくない。精神神経科医、カウンセラーなどを巻き込んだ取組みをすべきと考える。

また、公的病院が参加していないのはおかしい状況であり、国の「やる気」が感じられなく、参加者を増やせという保健所にも腹が立つというご意見もありました。

(図33~34)は市の保健所の事業の評価だが、  
図33

### 事業の評価(函館市保健所)

#### ポジティブな点

妊産婦に対するアンケート結果からも、教室に参加したものに育児不安の解消に一定の効果があつた。  
妊娠中は出産についての関心は高いものの、なかなか育児に実感がわかない時期でもある。しかし、小児科医の指導を受けた事が、出産後に参考になったとの母親の意見もあるように、早い時期からの保健指導が育児不安の軽減にある程度効果があつたと考える。

出産直後から1カ月間が育児不安が強いと言われており、本事業を受講した産婦は5名ではあつたが、参加した対象者については育児不安の解消に一定の効果があつたと思われる。

教室の開催を妊婦やその配偶者の参加しやすい土曜・日曜日に設定したことで、父親の教室参加が約45%あり、父親の育児参加意識の向上に効果的であつた。

図34

### 事業の評価(函館市保健所)

#### ネガティブな点

参加者数が見込みより少なかったことが問題点と考える。

広報については、ポスター、リーフレット、両親学級等で周知啓発に努めてきたが、実施までの期間も短かつたことで、広く対象者の関心を得る事ができなかった。

本事業の推進には、産婦人科と小児科の連携が必要である。小児科への紹介は産婦人科医の妊産婦に対する事業内容の説明が効果的であると考えられるが、説明が十分でなかったと思われる。

また、紹介件数に偏りがあるなど、個々の医師の認識に差があることも、受講率の低さの要因と考える。

妊産婦に対するアンケート結果からも、教室に参加したのものには育児不安の解消に一定の効果があつたのではないかと。妊娠中は出産についての関心は高いものの、なかなか育児に実感がわかない時期でもある。しかし、小児科医の指導を受けたことが、出産後に参考になったとの母親の意見もあるように、早い時期からの保健指導が育児不安の軽減にある程度効果があつたのではないかと。出産後1カ月間が育児不安が強いと言われているので、その間に受講された妊婦さんは5名であつたが、参加した対象者については育児不安の解消に一定の効果があつたと思われる。

教室の開催を土曜と日曜に設定したことで、父親の教室参加が約45%あり、父親の育児参加意識の向上に効果的であつた。否定的な面では、参加者が見込み数より少なかったことが問題と考へておられたようですが、東京で行われた全国の事業報告を見ますと、函館は結構参加者が多かつたようです。

広報についてはポスター、リーフレット、両親学級等で周知啓発に努めてきたが、実施までの期間も短かつたことで広く対象者の関心を得ることができなかった。また、本事業の推進には、産婦人科と小児科の連携が必要である。小児科への紹介は産婦人科の妊産婦に対する事業内容の説明が効果的であると考えられるが、説明が十分でなかったと思われる。

また、ある先生は、この事業が成功するかどうかは産科医の理解と熱意と小児科医の質が左右するとおっしゃっていましたが、紹介件数に偏りがあるなど、個々の医師の認識に差があることも受講率の低さの要因と考へるとのことです。

私の感想は、小児科医はもとより、産婦人科医や妊産婦さんにも非常に有意義な事業であることは、ほぼ意見が一致した。今回は準備期間が短かつたために周知徹底が難しかつたが、その割には他の地域に比べると参加者が多かつた。その一番の理由は行政(保健所)と医師会(産婦人科医会と小児科医会)の連携が以前から取れていて、連絡が密だつたことではないだろうか。

しかし、産科医からの紹介にかなり偏りが見られたのは、産科の先生方の本事業への認識の差と

考えられる。また、マスコミを通じたPRもある程度効果があったのだろうとは思いますが、まだ徹底はしていないようです。そして、土曜日、日曜日に開催日を設定したことで配偶者の参加も増えたのですが、しかし、妊産婦さんの参加者が1名の開催日が28回中9回もあり、開催回数は再考すべきである。妊婦さんはまだ赤ちゃんに関する実感がなく、実際赤ちゃんに触れ合う体験教室もやってみる意味があるのではないだろうか。産科退院後1カ月検診までの間が育児不安が一番強いので、プレネイタルよりも、ペリネイタルの方がよ

ろしいだろうと。それから、経産婦さんの参加希望も意外と多かったということである。

最後に、小児科医は子供が病気になったときだけ受診する存在ではなく、子供の成長・発達や予防注射・栄養などについての相談もできる医師であることもお母さん方に知っていただきたく、非常に良い機会であると感じた。また、出産前から育児支援がスタートでき、お母さんや家族と面識を得ることで育児不安の軽減が可能であろうと私は思いました。

### お知らせ

## 電子メールを利用している 会員への情報提供について －メールアドレスの登録－

### ◇情報広報部◇

本会では、インターネットを利用し、電子メールにより緊急性の高い情報を、会員の皆様に送信提供しております。対象は当会のダイアルアップ接続登録者(hokkaido.med.or.jp)全員と他プロバイダの電子メールアドレスをお持ちになっていて、本会にアドレスを登録している会員です。

他プロバイダの電子メールアドレスの登録につきましては、随時受け付けておりますので、是非ご登録いただきたくご案内いたします。

なお、今回、他プロバイダの電子メールアドレスをご登録になれる会員には、もし、でき

れば本会のメールアドレス(hokkaido.med.or.jp)を取得(無料・ダイアルアップ接続申込み)されるようお願い申し上げます。

### ●電子メールアドレスの登録方法

電子メールまたはFAXで、ご氏名、登録メールアドレスを明記のうえ、下記宛お送りください。

・申込先メールアドレス：

add@office.hokkaido.med.or.jp

・申込先FAX番号：(011)252-3233

### お知らせ

## 北海道医報ファイルの送付について

北海道医師会広報部では、北海道医報を整理・保存するためのファイルを作成しております。ご希望の向きは下記までご連絡下さい。無償にてお送りいたします。

記

申込先：北海道医師会事業第二課

〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目

TEL(011)231-1725 FAX(011)252-3233